

My 図書館

国際コミュニケーション学部教授 トーマス・グロース



私が大好きなテリー・ブラチエットが書いた「ディスクワールド・シリーズ」では、アंक・モアポアクという町が中心になっている。その町には、大学があり、その名前は「見えない大学」である。なぜなら、「見えない大学」では、主に魔術が教えられているからです。教員はすべて魔術師で、寝食の他は様々な変わった研究を行っている。無論、「見えない大学」には、図書館もあるが、かなり危ないところである。図書館のドアには大きな看板が張られ、「危険！ 入るべからず！」とある。魔術の本は互いに読みあい、時には、学生は本を読むだけでなく、本に読まれるときもある。だから、大変危険だそうである。司書は1人しかいない。実は、「1人」と言えなく、オランウータンなので、「一匹」と言えばいいであろう。魔術の大学には、ときに事故もあるので、司書は以前人間であったが、魔術の事故に巻き込まれ、オランウータンに変わった。本人にとっては、恵まれている状態になったようで、ことばができなくなっているの、学生と会話をする必要もなくなっている。「見えない大学図書館」のもっとも怖いのは、「図書空間」という不思議な現象である。図書空間にはすべての可能な本が存在し、未だ書いていない本でさえ存在している。そのため、図書空間は実際の図書館より広くて、十分な知識のない者は道を迷い、尾羽うち枯らす。

細かくまで比べなくてもいいが、愛知大学図書館は「見えない大学図書館」と随分違っていると言える。司書は、無口のオランウータンでないどころか、やさしい人たちである。どんな変わった質問にでも寛容に答えてくれる。変身されることを怖がることはない。一方、図書空間というのは愛知大学図書館にもあることを否定できない。実は私は図書空間に入る羽目になった。図書空間に入ったという感じの1つは、本棚のマークが読めなくなることである。三步前には分かっていたのに、少し進んでいくと突然、マークが違って、前

に戻ってもマークが無い時がよくあるのである。

多分、図書館の奥に入るのは司書の訓練が必要なのだと思われる。学生たちが図書館を司書と同様に利用することは期待してはいないが、実際には、特に学生に利用してもらいたいと思っている。

図書館というところの特徴は広さである。その原因は、本が十分になれば、大した図書館に成らないことである。残念ながら、本の数がまだ増えるという見込みがある。どの学問の分野でも、研究が活発で、速やかに進んでいく。その研究結果は本として出版され、いつか図書館に入る。実は、毎年図書館に必要な本の数は爆発的に増えている。ある分野では、本に出版されたら、内容はもう遅れていることもある。特に自然科学はそうである。大学生にとって、その図書館の本の山からどうやって勉強の役に立つ本を選ぶのか？

本の探し方などについては、大学生向けの説明会が設けられているが、それは検索技術の案内に過ぎない。そういう案内は必要で、分かりやすく行ってきてあげたいが、内容的な案内も必要であると思う。

図書館の図書はすべて同じく重要ではない。ある本は専門家のみが使用し、また、ある本は1年生のみが使用する。でも、どれぐらい使用されているのか？ 例えば、どの本が一番よく借りられているのかの情報は全然ない。経済学や社会学などのどうしても必要な図書は何であろう？ 大学生がどの分野のどの本を一番評価しているのかも不明である。

ですから、そのリストを作ってもらい、それをアクセスしやすいところに公開してもらいたい。内容についての案内なので、教員の協力は必要である。第一歩として、アンケートを教員に配布し、それに自分の分野にとっての一番重要な本5冊を推薦してもらおう。さらに、最近の研究結果はインターネットにもよく公開されるので、できれば重要なホームページのURLも教えてもらいたい。そうすると、広い図書館は少し透明になり、大学生に使いやすくなるであろう。